

胃癌からの両側精巣転移の1例

箕面市立病院泌尿器科 (部長: 岡 聖次)

野澤 昌弘, 西村 憲二, 原 恒男, 岡 聖次

A CASE OF BILATERAL TESTICULAR METASTASES
FROM CARCINOMA OF THE STOMACHMasahiro Nozawa, Kenji Nishimura, Tsuneo Hara
and Toshitsugu Oka

From the Department of Urology, Minoh City Hospital

A case of bilateral testicular metastases from carcinoma of the stomach is reported. A 39-year-old man was admitted to our hospital under the diagnosis of carcinoma of the stomach. During the hospitalization, the bilateral scrotal contents had become swollen and painful, but we could not resect this lesion because of his critical condition. Then he died of carcinoma of the stomach. The autopsy revealed that he had bilateral testicular metastases from carcinoma of the stomach.

Including our case, 10 cases of testicular metastases from carcinoma of the stomach are reported in the Japanese literature. We mainly discuss the route of metastasis.

(Acta Urol. Jpn. 41: 137-139, 1995)

Key words: Testicular metastasis, Carcinoma of the stomach

緒 言

転移性精巣腫瘍は稀な疾患とされている。今回われわれは胃癌の両側精巣転移の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者: 39歳, 男性

主訴: 両側陰嚢内容の疼痛性腫脹

家族歴: 特記すべきことなし

既往歴: 3歳時, リウマチ熱. 29歳時, 高血圧症.

33歳時, 左視床出血

現病歴: 1992年3月, 上半身に浸潤性紅斑が多発したため近医受診。梅毒疹と診断され治療を受けるも改善せず同年7月21日, 当院皮膚科入院。精査の結果, 胃癌(T2NXM1)の皮膚転移と判明した。同年8月18日より化学療法を開始されたが皮膚転移巣はさらに増悪し腰背部の著しい疼痛も出現したため, 同年11月より化学療法を中止し, 以後は疼痛管理が行われた。1993年1月頃より両側陰嚢内容の疼痛性腫脹が認められた。

現症(1993年1月): 栄養状態不良, 貧血著明, 上半身に浸潤性紅斑が多発し, 頸部, 腋窩, 鼠径リンパ節は腫大していた。両側陰嚢内容は腫脹し圧痛を認め

た。

検査成績(1993年1月)・血液一般では, RBC $244 \times 10^4/\text{mm}^3$, Hb 7.7 g/dl, Ht 25.4%と中等度の貧血を認め, 血液生化学では, アルカリフォスファターゼ 4,040 U/l (正常 111~295 U/l), LDH 524 U/l (正常 217~391 U/l)が高値を呈した。また, 腫瘍マーカーでは, CA19-9 920 U/ml (正常 37 U/ml 以下)が高値を呈した。尿検査所見には異常を認めなかった。

臨床経過: 両側陰嚢内容の疼痛性腫脹出現時には皮膚転移巣は顔面を含む全身に拡大し, 当科的には陰嚢内容に対する手術を行えないまま経過観察していたが, その後, 全身状態が悪化し, 1993年2月9日, 癌死した。

精巣の剖検所見 (Fig. 1): 精巣の大きさは右 $5.5 \times 4.3 \times 2.7$ cm, 左 $5.3 \times 4.2 \times 2.9$ cm で重量は左右ともに 32 g であった。実質はほとんどすべてが充実性の腫瘍で置き変わっていた。

病理組織学的所見 (Fig. 2): 胃癌の組織型は低分化腺癌であった。精巣は正常構造が消失し, 精細管固有膜は肥厚して造精細胞は全く消失していた。間質には胃癌原発巣と同じ癌細胞が著しく増生していた。なお, 剖検によるその他の検索の結果, 脊椎全体にびまん性転移巣, 両側全肺野に無数の微小転移巣, 両側腎および両側精巣上体にも転移巣を認めた。また胃周囲

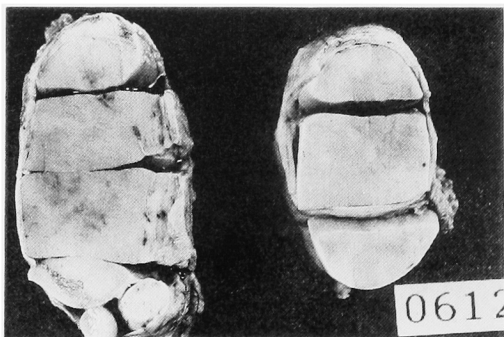


Fig. 1. Bilateral testes at autopsy. Parenchyma of testes was almost replaced with the substantial tumor.

リンパ節および大動脈周囲リンパ節にも転移を認めた。

考 察

転移性精巣腫瘍は比較的稀であり、欧米での報告¹⁻³⁾によると全精巣腫瘍中の0.8~2.3%とされている。また本邦においては桐山ら⁴⁾が日本病理剖検輯報に基づき、1967年から1976年までの剖検例を集計しているが、これによると転移性精巣腫瘍188例のうち原発巣として最も多いのが胃癌で48例(25.5%)であった。泌尿器科領域の腫瘍では前立腺癌10例(5.3%)、膀胱癌7例(3.7%)となっている。しかしながら、文献的には、本邦における胃癌の精巣転移報告例はきわめて少なく、われわれの調べたかぎり自験例を含め10例⁵⁻¹³⁾にすぎない(Table 1)。これらを検討した結果、平均年齢は58歳(39歳~79歳)で、自験例は最も低い年齢であった。患側としては右側に多い傾向(右側8例、左側1例、両側1例)を示し、両側は自験例が初めてであった。胃癌の部位、肉眼型および組織型には特別な傾向を認めなかった。また、他に陰嚢内転

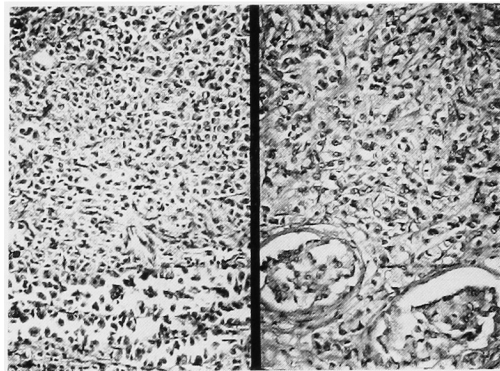


Fig. 2. Left: microscopic finding of the primary carcinoma of the stomach showing poorly differentiated adenocarcinoma. Right: microscopic finding of the testis showing the interstitium with marked proliferation of the same cancer cells as the primary carcinoma. (HE stain $\times 400$)

移巣を認めたものは自験例を含め7例であった。

胃癌の精巣への転移経路としては、リンパ管逆行性、血行性、直接播種および精管逆行性の4つの経路が考えられている^{14,15)}。一般に消化器癌の転移経路としてはリンパ管逆行性が最も多いとされ¹⁶⁾、胃周囲リンパ節、大動脈周囲リンパ節より精索中のリンパ管を通して精巣に達すると考えられる。つぎに血行性転移には動脈性転移と静脈逆行性転移の2つが考えられ、動脈性転移は一般に遠隔転移の代表的な転移経路である。この場合は血流が門脈系より肝臓を経由して大循環系に入り精巣動脈より精巣にいたる。静脈逆行性転移の可能性としては、まず血行性あるいはリンパ管逆行性に腎臓に転移したのち精巣静脈を逆行して精巣転移をきたすことが考えられる¹⁷⁾。つぎに直接播種は腹膜から鼠径管を経て転移する経路で、特に腹膜鞘状突起が開存している場合に起こりやすいとされている¹⁸⁾。

Table 1. Cases of testicular metastasis from carcinoma of the stomach in Japan

症例	報告者	報告年	年齢	患側	胃癌の部位	肉眼型	組織型	他の陰嚢内転移巣
1	大 越	1966	43	右	?	?	?	右 精 巣 上 体
2	平 田	1967	50	右	体中部後壁	Borr-1	粘 液 癌	無
3	竹 中	1971	60	右	幽門前庭部~胃角部	Borr-3	管 状 腺 癌	無
4	公 文	1982	66	右	幽門前庭部	Borr-3	未 分 化 癌	右精巣上体・精索
5	栗 山	1983	42	右	体 下 部	Borr-4	粘 液 癌	無
6	久保田	1985	79	左	?	?	?	左精巣上体・精索
7	安 井	1988	69	右	?	Borr-3	低分化腺癌	右精巣上体・精索
8	白 岩	1988	68	右	?	?	未 分 化 癌	右精巣上体・精索
9	川 西	1989	67	右	体中部大弯前壁	Ⅱc類似進行	低分化腺癌	右精巣上体・精索・精巣固有鞘膜
10	自験例	1994	39	両	体中部後壁	Borr-2	低分化腺癌	両 精 巣 上 体

精管逆行性転移は前立腺あるいは精嚢への転移がある場合に起こりえると考えられる。

自験例における転移経路としては、大動脈周囲リンパ節への転移が著明であったこと、および肝臓に転移巣が見られなかったことよりリンパ管逆行性が疑わしいが、皮膚転移巣が広範囲におよんで著明であったこと、脊椎全体および全肺野に転移巣が認められたことより血行性の関与が十分に考えられる。そこで、まずリンパ管逆行性大動脈周囲リンパ節に転移をきたしたのちその所属血管より大循環系に入り、血行性転移をきたした可能性も考えられるのではないと思われる。

結 語

39歳男子の胃癌からの両側精巣転移の1例を報告し、若干の文献的考察を加えた。

本論文の要旨は第146回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した。

文 献

- Shreyaskumar RP, Ronald LR and Larry K: Metastatic cancer to the testis: a report of 20 cases and review of the literature. *J Urol* 142: 1003-1005, 1989
- Price EB and Mostofi FK: Secondary carcinoma of the testis. *Cancer* 10: 592-595, 1957
- Pugh RCB: Testicular tumors —Introduction. In: *Pathology of the Testis*. Edited by Pugh RCB. 1st ed., pp. 139-159, Blackwell Scientific Publications, Oxford, 1976
- 桐山 啓夫, 吉田 修・日本病理剖検報よりみた睾丸腫瘍の実態. *泌尿紀要* 29: 155-168, 1983
- 大越正秋, 石川博義, 松永重昂, ほか: 胃癌の睾丸, 副睾丸転移の1例. *日泌尿会誌* 57: 1258, 1966
- 平田輝夫, 鈴木三継: 胃癌の男子性器(睾丸および副睾丸)転移の2例. *臨泌* 21: 51-55, 1967
- 竹中生昌, 森脇昭介: 睾丸転移をみた胃癌の1剖検例. *癌の臨* 17: 887-890, 1971
- 公文裕己, 難波克一, 村尾 烈, ほか: 陰嚢内転移性腫瘍の1例. *西日泌尿* 44: 249-255, 1982
- 栗山 洋, 梅下浩司, 野口真三郎, ほか: 胃腸腺癌で睾丸・膀胱に転移を来した1例. *日消外会誌* 16: 1060, 1983
- 久保田茂弘, 錦戸雅春, 野俣浩一郎, ほか: 転移性睾丸腫瘍(胃癌)の1例. *日泌尿会誌* 76: 931-932, 1985
- 安井元司, 大高克彦, 榊原 聡, ほか: 陰嚢内転移をきたした胃癌の1例. *日消外会誌* 21: 1845, 1988
- 白岩浩志, 樋之津史朗, 友政 宏, ほか: 胃癌を原発とする転移性陰嚢内腫瘍の1例. *日泌尿会誌* 79: 583, 1988
- 川西宣裕, 小山捷平, 堀田総一, ほか: 陰嚢内転移により発見された胃再発癌の1例. *癌の臨* 36: 101-104, 1990
- Howard DE, Hicks WK and Scheldrup EW: Carcinoma of the prostate with simultaneous bilateral testicular metastases.: Case report with special study of routes of metastases. *J Urol* 78: 58-64, 1957
- Hanash KA, Carney JA and Kelalis PP: Metastatic tumors to testicles. *J Urol* 102: 465-468, 1969
- 高井修道, 小山達朗, 山下源太郎, ほか: 転移性精索腫瘍. *札幌医誌* 16: 481-489, 1959
- Wachtel TL and Mehan DJ: Metastatic tumors of the epididymis *J Urol* 103: 624-627, 1970
- Lewis LG and Randall WS: Carcinoma of the spermatic cord and epididymis extension from primary carcinoma of the stomach. *J Urol* 51: 75-80, 1944

(Received on August 12, 1994)

(Accepted on November 21, 1994)